

〔目的〕今世紀、Erikson EH らの精力的な研究によって男性のライフサイクル研究は人間の生涯全体を発達論的視点から捉え、飛躍的に発展したが、女性に焦点をあてた研究はまだ少ない。本研究の目的は、東京女子医科大学を卒業した女性医師のライフサイクルの検討を端緒とし、これを専門職をもつ女性のライフサイクル論のモデル研究へと発展させるものである。

〔方法〕平成8, 4年, 昭和58, 51, 47, 38, 30年の各卒業生に就労状況, 生活のプロフィール, 職業および生活上の諸問題と満足度, ライフスタイルの満足度などを質問項目としたアンケート調査を施行した。

〔結果〕アンケートの配布は1997年11月(昭和58年卒のみ96年3月)であり, 12月現在で49%が回収された。各年代毎の回収率は, 卒年度の新しい順に, 26, 39, 62, 51, 59, 62, 60%となっており, 各項目は現在分析中である。

〔考察〕回収率からみると, 現在30歳代後半以降の世代がこのアンケートにより深い関心を示したことが伺われる。回答を比較, 検討したうえで, 東京女子医大卒業生のライフサイクルとメンタルヘルスについて考察する予定である。

3. 乳癌進展様式の解明と診断法の確立

(第二外科学) 神尾 孝子

乳管上皮から発生し, 周囲組織に浸潤あるいは乳管

内を進展して増殖する乳癌において, 特に“乳管内進展”は, 乳房温存術後の残存乳房に癌遺残をきたす要因として注目されている。術前に癌の進展状況を適確に評価するための診断法の確立は臨床上極めて重要な意義を有する。

本研究では乳癌の乳管内進展診断法の確立を目的として, 癌進展様式の病理組織学的解析を行うと同時に, 三次元構築による病理組織と超音波画像との一対一対応に基づき画像診断の妥当性と限界につき詳細な検討を行った。

この結果, 癌は極めて限局するものから扇状～広範な広がり呈するものまで多様な進展様式を示すが, 超音波はいずれの場合にも癌の乳管内進展の有無および範囲を診断するうえで極めて有用であると考えられた。すなわち我々が独自に開発した“超音波による乳管像分類(乳管内進展の有無の分類)”に基づく正診率は94.4% (n:198)であり, また, 癌進展範囲の正診率(誤差1.0cm以下)は85.0% (n:20)と良好であった。

孤立する極めて微細な乳管内癌進展巢の読影や, 良性上皮増殖性病変が混在する場合の進展範囲診断にはなお限界もあるが, 精度の高い乳管内進展診断が可能となった意義は大きく, 臨床応用による画期的成果が期待できる。